体育学における人間学的論議の試みとその視界

—Spranger, E. の教育学に基づいて—

阿 部 悟 郎

〈目　次〉

1. 序　論
2. Spranger, E.の教育学とその人間学的論議の中核的一形式
2. 1.　Spranger, E. の人間学的出発点とその着目点
2. 2.　Spranger, E. の人間学的視野とそこに映ずる存在形姿
2. 3.　Spranger, E. の人間学的論議と形而上への昂まり
2. 4.　Spranger, E. の人間学的視野とそこに映じる存在形姿
2. 5.　体育における人間学的論議とSpranger, E.の人間学的視野
3. 結　語
4. 註および参考・引用文献一覧

1. 序　論

体育学が体育の本質論議を立ち起こし、それを徹底していこうとすると、やがて人間学的な問題へと不可避に突き当たる。体育学においてこのような人間学的問題は、永遠の課題であると言われて久しい[1]。ところが、体育学におけるそのような人間学的な問題が不可避かつ重要なものであるとしても、それはやはり依然として難問の一つであり、体育学においてそれについての知的成果が明確な形で結実しているとは言い難い。実のところ、体育学のこのような人間学的な事情は、体育が、その概念構造上、その意味内容を基底的に担う教育[2]それ自体の人間学的な事情に起因するものである。即ち、実に教育は、それについての省察において人間理解と全く結びついており[3]、更に、そこには原理的な連関さえ認められるという[4]。従って、体育学は本質的に教育学の人間学的事情に類比的であり、その学的営為においては、人間理解を中心とした人間学的問題に対して必然的に無関心ではいられない。つまり、体育についての論議は、本質的に人間理解と密接に結びついており、おそらくそこには原理的な連関も認められるように思われる。そうであるならば、体育学における人間学的な問題は、必然的でそして本質的な学的課題である。

さて、体育学がそのような人間学的な問題を主題的に取り扱い、それについての学的営為をおし進めていくとしても、おそらくその難解さには大いなる戸惑いを覚えざるを得ないことであろう。実に、そのような問題は、ギリシャ以来の哲学の中心課題の一つであった[5]。いきおい教育学における前近代的な人間学的消極性・受動性のように[6]「体育学は、何よりも人間が何であるかといった問題については、他領域において導かれた学的認識をただ外側から受け取ればよい」と逃避的に思念してしまうかも知れない。ところが、体育学における人間学的な問題が、前述の如く、不可避で本質的な学的課題であるならば、そこには確固たる体育学的責任があると言えよう。従って、そ

れについても体育学的責任において明確に問題設定を試み、学的検討を進めていかなくてはならない筈である。おそらく、このような体育学における人間学的な問題は、最終的には体育学の言葉で論じられなくてはならないように思われる。ただ、体育学における人間学的蓄積が未確立である以上、まずはその確立に向けて学的努力を積み重ねて行かなくてはならないだろう。この為には、体育学は、さしあたり関連領域の人間学的論議に学び、そこから有効な知的契機を抽出し、それらを批判的検討を通じて体育学的に位置づけていくことが求められるように思われる。そこで、そのような試みの端緒として、ここでは教育学における人間学的論議に目を向けてみたい。

まず、教育学における人間学的論議を厳密に踏襲しようとするならば、それらはおそらく西欧古代にまで遡らなくてはならない[(7)]。ところが、それらをその人間学的問題設定の直接性と能動性から篩にかければ、ドイツ教育学における伝統的な陶冶論あたりから精神科学的教育学、そして所謂、教育人間学あたりまでの諸形式が浮かび上がってくる。体育学はまずそこにある人間学的諸形式に普く学んでいくことから始めなくてはならないように思われる。そこで、その試みの端緒として、ここでは先の精神科学的教育学を代表する教育学者の一人として数えられているSpranger, E. の教育学に焦点を当ててみたい[(8)]。実に、彼は精神科学的教育学のみならず、ドイツ教育学、ひいては現代教育学において最高位に位置づけられている[(9)]。もっとも、彼は、教育学領域においてあまり明確に人間学的枠組に位置づけられている訳ではないが、彼の学究動機の端緒には「人間とは何か」といった深遠な問いがあったこと[(10)]、そして自らの学究生活において「人間は本来何か、また何であるべきか、人間はいかに生きるべきか」について生涯に亘って厳しく問い続けていったこと[(11)]を考え併せるならば、その膨大な業績に秘められた人間学的な諸契機に対しては、教育学における人間学的論議の確かな一形式として敬意を払い、そこに注視していかなくてはならないように思われる。

これらから本稿においては、体育学の学的確立、とりわけその人間学的基礎の確立の為に、Spranger, E. の教育学の分析に基づいて、体育学における

人間学的論議の一形式を試みたい。

2. Spranger, E. の教育学とその人間学的論議の中核的一形式

2. 1. Spranger, E. の人間学的出発点とその着目点

Spranger, E. は、自らの学究生活を一貫する前述のような人間学的な要求についての詳細な解明を、当初は、哲学から受け取ろうと望んでいたのであるが、[12] それについてのあくなき探究は、やがて必然的に教育学の問題へと帰着することとなる。[13] そして、それこそが、彼の教育学の特色とされている。[14] そこで、Spranger, E. の教育学における人間学的論議を、その特徴的な形式から辿っていかなくてはならない。

人々が人間それ自体を問い、それを見極めようとする時、先ずそこに映じてくるのはその客観的な実在の諸形式である。例えば、人は歩き、人は思い、人は喋る。なるほど、人はその実在に即してみれば、なるほど物理的であり、そして心理的とも言える。実際、Spranger, E. が研究生活に就いた頃の人間学的認識の一般はそのようなものであったという。[15] しかしながら、そのような物理的なものや心理的なものといった視座は、単に科学的な構成の目的の為の中立化に堪え残った要素に過ぎないという。[16] 確かに、人間が動物であるという点では、人間理解においては、例えば、物理的な見方が不可欠であり、そこに出発点を認めざるを得ないこともある。[17] また、同様に、人間理解において、心理的な見方も相応の有用性を有すること疑いなく、これによって、一般的に容認されてきた簡略表現として、人間の内的作用や諸々の反応を一括し得る。[18] ところが、これでは例えば、人々の食事の際の快感も、芸術鑑賞の際の崇高な感激も、全く同一のものとして処理されてしまいかねない。[19] 考えてみれば、人間の心というものは、単なる内的な欲求充足等よりも遙かに広い価値連関の中にある。[20] そこで、Spranger, E. は全き人間理解の

為に、新たに、意味内容や価値といった視座を思念し[21]、そこから人間存在を照らしていったのである。即ち、彼は人間の現実態を価値の視座から把握しようとしたのである[22]。そして、これによって、人間の存在形式は、所謂、心理的なるもの以上のものとして、精神的な存在として立ち現れてくることとなる[23]。人間について客観的な実在においてのみ考察しようとするならば、人間存在のこのような重要な局面を見失うおそれがある[24]。それは、単なる心理ではなく、改めて価値や意味と連動した精神という世界に他ならない。まさに、人間は、単なる物理的・心理的なものに留まらない、寧ろその本質は精神的な意味世界においてこそ生きているのである[25]。ここが彼の最も知的関心を注いだところであり、これによって彼は師ディルタイを克服し、それまで不分明であった心理的なものから、所謂、精神的なるものを境界的に明確化していった[26]。確かに、Nosbüsch, J. が述べるように、人間は、それが如何に生命的・身体的なものに見受けられるとしても、究極的にはただ精神からのみ適切に理解され得るものかも知れない[27]。

2.2.　Spranger, E. の人間学的視野とそこに映ずる存在形姿

さて、Spranger, E. は、その人間学的営為において、あのような精神という視座に着目し、そこから人間とその生を読み解こうとしていった。そのような視座の設定は、当時の人間学的な事情からして、おそらく新たな試みであり、その有効性は、そこから見えてくる特有のものによって論じられることとなる。それでは、そのような視座から見えてくる人間存在とその生の在り方はどのようなものであったのであろうか。そこで、先ずSpranger, E. に従い、人間の存在とその生の内奥にあるそのような精神という内なる世界を覗いてみなくてはならない。

Spranger, E. によれば、人間は、その存在の深まりに沈潜すれば、やがて自らの存在の最奥において、独自の内界を発見するという[28]。人間はその実在的な様相にかかわらず、その存在の最奥には独自の内界を有する。それは、まさに自身の実存の根を深くおろしていくことができる聖殿である[29]。そこは

全く内密の経験の場であり、そこでは人間存在の全ての価値が経験されるという[30]。即ち、人間はそのような独自の内界において、全く内密に多様な価値を経験する。例えば、よさも充実も感激も、全てそこでの内密の経験に起因する。そこで、Spranger, E. は、そこにおける、そのような価値の内なる経験を価値経験Werterlebnisと称するのである[31]。

考えてみると、人々は、時の流れや、押し寄せてくる運命の中で、常に新たな価値経験に巻き込まれる[32]。そして、人間存在の核はそのような価値経験の変遷によってつくりあげられていく。従って、人間はその存在の内において、常に何らかの価値契機と対峙していると言えよう。そして、そこでの生は、何れのものであっても相応な独自の価値契機を有している[33]。従って、そのような精神的な諸経験は、その内容の全てが個々の生の全体的意義に影響することだろう[34]。そして、それがその存在の価値全体に対して意味する処が多ければ、それだけ生の連関の全体においてより高次なものとなる[35]。Spranger, E. は、次のように述べる；

「最高の価値経験というものは、仮にそれが単なる一契機に過ぎない（ような取るに足らない）ものであるとしても、その精神的本質においては、その生全体を意味付与的に輝かせてくれることであろう[36]。」

従って、価値経験とは、何らかの形で意味付与的にその存在を照らし出してくれる。即ち、それが些末なものであっても、精神的形式の形成に、意味付与的に決定的な力を与えてくれるのである[37]。即ち、人間は、価値経験を通じて、その独自の精神的形式をつくりあげていくのである。実に、人間の精神的な形成とは、ただ単に知識の蓄積ではなくて、心の感受性と形成力の全てによって、価値を独自に受容していくことによる[38]。価値経験を通じた価値の内的受容こそが、精神的な形式の形成に繋がっていくと言えよう。そして、そこでは、その感受性と形成力が不可欠なるものとして前提とされる。Spranger, E. は、人間の精神的な存在にあるそのような感受性と形成力、と

りわけ価値に対する感受性と形成力を、価値感受性と価値形成力と称する。[39] そして、それらは価値の個人的体験能力であり、[40] 更には価値についての精神的能動性と言えよう。[41]

さて、人間の存在の内にある価値感受性と価値形成力は、人間がその存在において価値内容と意味を自らに与えることができるような能力[42]の主要な契機となるだろう。人間は、ますます多くの客観的価値を受け入れ、それによって自身に大きな内的充実と多様性を与えようとする。[43] 実に、価値の受容者は、最後には自らがそれを生み出さなくてはならないのである。[44] 即ち、全ての価値は、心の土壌に生まれいでる。[45] そして、価値はそれ自体彼方の観念界に住まうものではない。[46] つまり、価値は固定した本質性として超主観的な領域にあるのではなく、常に人格的な精神構造の中にあるという。[47] そして、価値というものは、不断の価値経験によって、個人的に創造していく以外に道はないのである。[48] 従って、価値経験は、内的な創造となる。[49] 価値経験において価値と対峙し、それを自らにおいてよく受容することは、やがて内なる価値の創造をもたらしてくれるのである。それによって、人間は高まっていく。即ち、人間は、精神的な存在形式において、価値形成的に高まっていく。従って、Spranger, E. がそこに看た人間の存在形姿は、まさに価値形成的な在り方であったのである。まさに、人間の陶冶は全く固定的完結的ではなく、寧ろ実に発展的であり、それについての誠実な思念にこそSpranger, E. の教育学の特性の一つである。[50]

2. 3.　Spranger, E. の人間学的論議と形而上への昂まり

さて、Spranger, E. が、その人間学的営為において、あのような精神という視座に着目し、そこから人間とその生を読み解くなかに映じてきた人間の存在形姿は、価値形成的に高まりゆく在り方であった。人間は、その精神的な存在形式において、価値を受容し、その内に価値を創造し、それによって独自の価値世界を構築していく。価値の内なる創造によってこそ、人間は高まりゆくことができる。そこで、Spranger, E. は、そのような精神的な存在

形式の核心を求め、その存在の根源へと突き進んでいく。そこに映じてきたものは、果たして、人間の存在の最奥から生じる、より深い価値への憧憬であった[51]。Spranger, E. は、人間は、まさにその憧憬の最も深いところで生きているとさえ述べる[52]。価値への憧憬こそが生の核であり、その力によって生は遂行されていく[53]。それは、人間に創造的な形式を与え、理想を求める上昇的な動機を内在した広大な力を湧き起こす、まさにエロス的である[54]。Spranger, E. は次のように述べる；

「永遠なるものから湧き出づるこの力は枯渇しない。エロスはいかなる若いたましいも、新しくゆがめられていない状態で、自らに抱ききたる。ここで最終的なるものがとうとう明らかになる。即ち、それはまさに育ちゆくたましいに内在する憧憬の力に他ならない。例えば、エロスの偶然の対象の一人の人間が、その理想像からはなはだ遠いとして、傍目にはそれが全く誤まれる異常なものと（さえ）思われるかも知れない。ところが、エロスそれ自体は、それによって否定されることはない。エロスは、拙きものにさえも、それの理想を認め得ると信じるのである。それは、たましいの最内奥に由来する理想化の性質の証しであるに過ぎない。そのたましいの最内奥で育まれた夢想は、高められた神秘的な光を放ち、貧相な現世を照らし出す。それは無尽蔵な愛であり、理想化の夢想は美を渇望し、それを信じ、創造を悦び、世界を眺めるのである。それはあたかも生命を与える春陽の微風のものにあるかのように、眺めるところはどこでも高貴なものを目覚めさせていく。エロスの暖かな光を浴びて、生は育ちゆく。それを目の当たりにしたとき、人々はエロスを認めることであろう。エロスによって何ら新たなものが生じてこないならば、たとえそこに情熱や熱望があったとしても、真なるものではない。まさに、エロスは、人間形成的であり、そして世界形成的なのである[55]。」

Spranger, E. は、人間の存在と生の基底にエロスをみるのである。エロスは永遠なるものから湧き出づる広大な力であるという。それは、単なる情熱とは異なる極めて形成的＝創造的な力なのである。人間は、誰しもが、その

存在の根底にエロスの力が湧き出づる泉を有しているが故に、理想を渇望し、そこに向かって歩もうとする。人間はエロスの内なる躍動によって、新たな価値を感知し、それに惹かれていく。人間のその精神的な存在形式における価値受容的・価値創造的な生の遂行は、このようなエロスの内なる胎動による。従って、人間は、その精神的な存在形式において、エロスによって本質的に価値に召されており、常に価値形成の道程にあるのかも知れない。このようなエロスのもつ価値への憧憬には、絶対世界の想起と共に、自らが一つのKosmosたらんとする憧れが存在する。[56] それを、Spranger, E. は、神から分離された感情に起因し、もともと与えられていた神との合一の予感を内に秘めた憧憬とみる。[57] それは、郷愁にも似た思慕的な憧憬とも言えよう。Spranger, E. は、次のようにも述べる；

「エロスが授けてくれるものは、生の源泉から湧き出づる力である。我々は、その作用に迫りゆくことができる。それのみが理念を生み出す。理想化の力、即ち、その究極的な価値可能性という意味において、人間と世界を現存の現象を超えて高めゆく力は、エロスから生じ、そして、エロスからのみ生じてくる。[58]」

エロスは絶対世界を思慕し、それを求めて形成的に躍動する。そこには形而上的な昂まりを否むことができない。これによって、人間は自らを超えて高まりゆき、やがては普遍へと到達しようとする。即ち、人間は、陶冶の過程において自らを超越しながら神的なものと出会い、神へと接近することができる。[59] そして、人間がその現存在において価値を無限に実現していき得るならば、それは神に等しいという。[60] そして、そのように、人間の存在の最内奥に価値が最高に溢れた状態を、神の恩寵と呼ぶのである。[61] Spranger, E. のこのようなもの言いは、些か観念的に過ぎ、実践性の欠如[62]や現実の厳しさに縁遠い等といった批判[63]を否むことができないが、このような形而上的色彩は、Spranger, E. が半世紀以上にわたる思索の末に到達した、いわば教育学的認識の結晶とでも表現し得る独特の学問的境位である。[64] それ故に、

Spranger, E. は、教育学においては、とりわけ教育の根本現象を見極めようとするならば、形而上的なものを無視することはできないと考えるのである。[65] 実に、教育学における人間理解の営為も、形而上のものを無視しては成立し得ないかも知れない。Spranger, E. の人間学的課題は、形而上への関わりによって、その豊穣な視野を保持しているとも言えよう。実に、彼の胸の内には、宗教的・倫理的なものを源泉とする人間の本質についての確信が燃え続けていたという。[66] 実に、彼の人間学的な構えは、所謂、ドイツ理想主義の思想的伝統の上にあり、[67] 更には、それが根本において、強いキリスト教的倫理観に貫かれているといってよいだろう。[68] ただし、それがSpranger, E. の教育学的＝人間学的営為の学的意義の一端を奪い得るものでは決してない。おそらく、形而上の絶対普遍は人間の意味理解への必要不可欠の要請であって、それはその真理を保証するような基礎付けの何たるかを指す、単なる便宜的な用語法に過ぎない。[69] そうであるならば、やはり人間理解の試みにおいても、ただその実在にのみ囚われることなく、その存在の最内奥にまで突き進んでいく勇気が求められるのではないだろうか。重ねて、彼の教育学的＝人間学的業績が、その神学的色彩によって、不当に軽んじられてはならない。後進の人間学的論議は、そこにある形而上なるものとの知的格闘にも、傾聴に値する人間学的営為として敬意を払い、その人間学的認識の形成過程を辿っていかなくてはならないように思われる。

2. 4. Spranger, E. の人間学的視野とそこに映じる存在形姿

Spranger, E. は、人間の存在と生の本質を求めて、その存在の内奥に目を向け、そこに価値形成の動態をみた。人間は、絶対的な価値への憧憬によって、その存在の内に価値を形成していく。即ち、それは、その精神的な存在形式における、価値形成的な生の遂行と言えよう。そうであるならば、人間の精神的な存在形式は、常に価値連関の中で生きているのかも知れない。そして、考えてみれば、誰しもが、その存在の内には、精神世界において生み育てた価値独自の集合総体を持ち、[70] そこに峻立する。しかしながら、それは

固定的完結的なものではなく、発展的なものである為、常に再構成の波に晒されてある。そして、現実の荒波においては、そこに絶えず対決を迫り来るものがある。時としてそれが価値的な闘争を引き起こすこともある。[71] 価値創造の契機は順風な暖かさにのみある訳ではなく、寒風や荒嵐の厳しさの中にさえもある。そして、そこでは如何なる些末なことであっても、人間の生の全体的意味と全体的価値にとって、重要でないものはない。[72] 実に、若者の価値可能性の豊かさは、逆説的には価値の内的欠乏を意味し、それ故に、往々にして価値的な葛藤に晒されるが、これを正しく経ることによって、彼特有の精神的な生産過程が生じてくるのである。[73] 従って、人間はその価値経験において撹乱されながらも、苦しみの果ての正当な克服によって、新たな価値世界を構成していく。生の苦しい闘いにおいてのみ内的な克服が得られ、それが自らの真なる高次な可能性へと導いてくれるのである。[74] Spranger, E. は次のように述べる；

「成熟の背後には、常に克服がある。苦闘の中での責めに与ることなしに、克服はあり得ない。そのような内的な格闘には、いずれにせよ『これはできない』、『あれは許されぬ』といった悲劇的な苦難がある。我々をより高い価値段階に高めてくれる苦難の正当な弁神論が、ここに存在する。人間は、苦難なくしては浅薄なままに留まるであろう。苦難は、人間に深みを与えてくれるのである。[75]」

それまで独自に創り育んできた価値世界は、その未熟さ故に、常に危機に晒されているが、そのような危機は、同時に価値世界の発展的再構成の為の有効な契機でもある。自らをより豊かに高めゆく為には、ある時は危機に陥り、ある時はそれに打ち克つような、心を揺さぶり動かす激しい経験に身を置くことも必要となる。[76] まさに心を震撼させるような奥深い価値経験は、価値の世界を築き上げるプロセスなのである。[77] そのような内的格闘によって不断の実証と自己修正が為され、個々人の価値世界が次第に築き上げられていくのである。[78] 価値を生み育てる為には、そこを耕す労苦を避けることができ

ない。つまり、そのような内的価値世界の実質については、外側から簡単に与えることはできないが[79]為に、自らが努めて耕しゆかなくてはならないのである。苦しくも進みゆく価値形成の道程について、Spranger, E. は、次のようにも述べる；

「それは、まさに金坑の（労苦の）ようなものである。その地表の次の層には些細な価値の鉱が見える。そして、真の金鉱脈が現れる深みに達するまで掘り進む時にのみ、採鉱されるのである[80]。」

真なる価値を獲得するには、相応の努力が必要なのである。そこにおいて価値の一端を垣間見たとしても、それらを自らのものにするのは容易ではない。鉱脈を探しあて、その真なる姿を求め、そこを掘り進む労苦は、決して安易なものではない。時に鉱脈を求めて右往左往しながら、時に岩盤の堅強さに辟易しながら掘り進む。そして、そこまで辿った坑路は、真の金鉱脈への到達によってようやく正当なものとされるであろう。即ち、価値の内的構築は、決して直線的に進行することなく、定められた航路を持たず、時に価値の格闘に彷徨い、時に押し迫る価値に圧倒されながら、それでもその過程の一つ一つを正しく克服することによって、いわば螺旋的に個性化の道を辿っていくのである[81]。換言するならば、価値格闘の道は独力で歩むが故に、そこに辿る過程も独自のものであり、その果てに到達した価値世界もやはり独自のものである。誰しもが、自らのもの以外の価値格闘の道を歩むことはできない。そして、誰しもが、自らのもの以外の価値世界を持つことはできない。可能性はやがて独自性へと進みゆくのである。実に、精神的な価値形成が進行するにつれ、人格における価値世界の一面的な個性化の道を辿る[82]。ここに人格形成の過程をみることができるように思われる。従って、人間はその可能性とともに世界の前に立ち、その労苦すら受け入れることが求められる。Spranger, E. は、次のように述べる；

「それは、心に最高のものを引き入れることに対する、一種の開放性や受容性である。我々はそれを（心の）純粋性と呼ぶ。まさに、人間のなすことを超えて神の恩寵に与ろうとすることが強調されるならば、人間には、他ではなく自らに向けられた心の育成という最終的な意義として、その器を純粋に保つこと以外に道はない。即ち、苦しみに対しても純粋であること、そして歓喜に対しても純粋であることである。そう、『運命を充実する人には、苦しみも歓喜も笑いかけてくれる。』のである。[33]」

従って、人間は、その価値形成の道程をその先へと歩み進む為には、どこにあっても迫り来る運命においても、つとめて純粋にあらねばならない。歓喜に、そして労苦にさえも価値契機は存する。否、人間のいかなる生の断面にも、それぞれの価値契機が何らかの形で含まれているのである。[34] より高き価値世界の構築の為には、それまで堪え残ってきた内的価値世界を破壊するような激しい闘争を迎えなくてはならないのである。[35] もちろん、そこでは逃避することも無関心をきめこむことも自由であろう。そうではあっても、そこを超えなくては先へは進めない。やはり、人間は、その価値形成の道程において迫り来るものに対しては、まずは純粋にそれを受け入れ、そこに身を投じて行かなくてはならない。その果てにこそ、その先の道程が拓かれてくるのである。

さて、人間は、その存在において数多くの価値経験を得て、独自の価値世界を築き上げていく。人間のそのような価値形成の道程は何処へと向かっているのであろうか。価値形成のそのような道程には、神の領野への方向性が予感させられる。Spranger, E. は、次のように述べる；

「その（価値世界の）高さを判断する基準は、既に宗教的な価値の性質を通じて示唆されているが、それは時間や空間そして物質を克服する程度によって測られる。なぜならば、無限なる形而上的な憧憬は、常に有限なるもの生命的なるものを超え

て、宗教的な言葉で表現される処の『高き』価値や、あるいは『別なる』世界へと呼ばれるものに向かっていくからである。[86]」

そうであるならば、人間は、価値形成の道程において神性の領野へと誘われていると言える。実に、そのようにしてつくり上げられた価値世界は、時間・空間、物質を克服し、有限性の束縛から解放し、超空間的超時間的に心を充実させるような価値連関へと進んでいく。[87] 人間が、その存在にそのようにして無限に価値を実現していくならば、それはまさに神に等しい。[88] なるほど、人間は価値形成の道程を歩みながら、神の領野へと近づいていく。Spranger, E. は、次のように述べる；

「真なる価値は、常に偽なる価値と格闘し、高き価値は常に低き価値と格闘する。真なる価値が支配し、それによってさえも高き価値が低き価値を排除しない、そのような無限の存在こそが、神と呼ばれるに値する。神は力として我にあり、そして本能としてそこに住まう。ところが、我々が神になることはない。むしろ、神は我を超越するものとしてそこにあり、我々の敬虔と究極の憧憬がそこに向けられるのである。そのような高き存在に近づくと感ずるとき、我々は最高の瞬間を予感する。しかしながら、神それ自身は決して来ることはないのである。それ故に、文化を欲する西欧人にとって、救いとは、既にありそこで到達しているような何かに対する瞑想的な帰依にあるのではなく、寧ろつとめての努力にこそある。恩寵は、（自ら）努めるものにこそ来たるだろう。自ら努めゆくもののみが神性の顕現に与り得る。しかしながら、（自ら努めゆかない）受動的なものは、神性の降臨を幾分不用意に、そして幾分不完全に受け取ることであろう。（このように考えてくるならば、）フィヒテの次のような深遠な言葉が心に湧き起こってくる。即ち、『汝は汝自身によってのみ存在せず、全てのものは神によって存在すると考え給え。そのように考えることによって、汝は高貴に、そして強くなることができる。しかしながら、神は汝に汝自身を与えたことによって、既に汝を助けている。それが為に、神は汝にそれ以上は施しによって助けようとは欲しない。それ故に、汝を助ける神はもはや存在せ

ず、汝は全てのことを独力で為さねばならない。そのように（弁えて日々）つとめ給え。[89]』

価値と戦い、価値をつくり上げていくそのような道程がやがて神の領野へと到るとしても、それは神が一方的に誘い授ける道ではなく、自らが自らの努力で高まりゆく道なのである。神の恩寵を無思慮に欲するものではなく、敬虔にそして純粋に努めを重ねゆくものに、神は微笑みかけてくれる。大切なことは、自らが求め、それを苦しくも努めることである。自らの存在とその生成に対して積極的であること、ここにSpranger, E. の人間学的な要求があるのではないだろうか。従って、Spranger, E. のそのような人間学的認識の中核は、人間の存在とその生成における価値形成の道程としてみることができよう。人間はその実在として多様に映じてくるが、それぞれが独自の価値形成の道程にあり、独力で、そして自らの努力で一歩一歩そこを前進的に歩みゆく。ここにSpranger, E. の人間理解の真意があるように思われる。それ故にこそ、Spranger, E. は次のように述べる；

「豊かさや充実は常に道の途上にあり、それはまさに憧憬とそして秘めたる希望と共にある。[90]」

従って、Spranger, E. のこのような言説に基づくならば、人間の価値形成の過程は、常に豊かさや充実を求める不断の道程として捉えられていく。そして、それをSpranger, E. の用語法に照らして考えるならば、Spranger, E. のこれまでの人間学的認識は、その大凡が、価値可能性という概念によって括られていくようにも思われる。即ち、人間は、内なる憧憬と秘めたる希望と共に、価値形成的に高まりゆく可能性の主体として描かれていくのである。まさに、内に胎動するエロスの如き広大な力によって、人間はその世界において価値を感受し、それを自らに形成しようとする。このようにして、人間は、その存在の内に独自の価値世界を築き上げていく。このような意味

において、人間は、その精神的な存在において、極めて豊かな可能性の前に立っていると言えるのである[91]。それ故に、教育は、おそらくより優れたものを生み出すであろうと期待されているけれども、実際には海のものとも山のものともつかない可能性に満ちたものに、強い関心を寄せる[92]。教育学という注視方向において、その人間学的論議における価値形成の可能性という視点は、極めて有効であるように思われる。Spranger, E. は、それ故に人間を敬虔にみつめ、次のように述べる；

「人間の全て生は神聖であり、自らの生もまた神聖である。しかしながら、それは何よりも、ただ生の価値可能性Wertmöglichkeitenゆえに神聖なのである[93]。」

まさに価値可能性という知的契機は、人間が常に価値形成、常に豊かさや充実を求める不断の道程にあり、そしてそれが常にその存在を超えてその先へと、即ち神性の領野へと歩み進むことを想い到らせてくれる。従って、神学の徒ならば、人間は、神の御子としてその救いに向かって努めなくてはならないと続けることであろう。人間の個々の存在に、そのような価値可能性を認め、その価値形成的な超越を神聖なものとして見つめていくことは、敢えて神学的な弁神論を持ち出すまでもなく、教育が教育として成立する上での根源的な姿勢であるのかも知れない。そして、その価値可能性への注視は、実に全ての生の神聖さについての信仰Glaubenを基礎としているとさえ言える[94]。そうであるならば、教育においては、その根本において、人間存在の神聖さに対する、とりわけその価値可能性の神聖さに対する肯定的な信頼が不可欠であるのかも知れない。

2. 5. 体育学における人間学的論議と Spranger, E. の人間学的視野

人間は多様にその実在を呈する。それは体育という事象においては同様である。体育において、例えば児童・生徒は走ったり、ボールを追ったり、ス

マッシュを拾ったり、その実在の様相は様々である。体育学が人間それ自体を主題的に問い、その認識の構築を求めていくにしても、やはり人間の実在的な多様性に困惑してしまう。ここでは、これまで辿ってきたSpranger, E.の人間学的論議に立脚して、体育学における人間学的論議の可能性の一形式を探っていきたい。

まず、人間は生命体としてそこに存在する。体育においても、人間はまずもって生命体であるところから論議は出発されなくてはならない。しかしながら、人間は、ただ単に生物として生命活動を保ち、専ら内的欲求情動に駆り立てられている訳ではない。実のところ、人間が人間として生を営むということは、少し異なった次元からの接近を要求することであろう。エネルギーを生成しては燃焼させ、蛋白を合成しながら生体を再構成するといった生物レベルでの存在形式は、確かに人間存在の基底ではあるとしても、それが全く本質であるとは言い難い。体育における人間存在も、まず生物的な存在でありながら、そして心理的な存在でありながらも、実はそれに留まらない存在次元が要請されていくのである。それは、Spranger, E.に従い、意味や価値に連動した精神という存在次元である。それでは、体育学における人間学的論議において、精神的な存在形式はどのように説明可能であろうか。

人間は、前述の如く、その精神という存在次元において、常に新たな価値経験に巻き込まれる。体育の事象においても、おそらく人間は常に価値と対峙し、そこで多様な形式で価値を経験している筈である。体育においても、人間は、独自に創り育んだ価値世界を有しながらそこに峻立し、迫り来る独自の価値契機と対峙し、それと対決する。そこでの例えば身体運動に付随する特有のよさや意義は、仮に刹那の瞬間であったとしても、個々の生全体を意味付与的に輝かせてくれるのではないだろうか。その瞬間、彼はそのよさや意義を受容し、それによって価値世界が発展的に再構成されていくのである。また、体育においても人間は、身の踊るようなよき瞬間のみならず、精神的な苦難や心を揺さぶり動かす激しい経験にも出会うことであろう。それと闘い、克服しながら価値形成の道は進むのである。

ところで、価値と戦い、価値をつくり上げていくそのような道程がやがて神の領野へと到るものとして描かれるとしても、それは例えば神が一方的に誘い授ける道ではなく、体育においても、なお自らがその労苦の中で自らの努力によって克服し、そして高まりゆく道なのである。自らの高まりの為に、神の恩寵を無思慮に欲するものではなく、運命においてそれと向き合い、そこで敬虔にそして純粋に努めを重ねゆくものに、神は微笑みかけてくれる筈である。大切なことは、自らがそこに立ち、それを求め、それを苦しくも努めることである。例えば、型や技の修得は、ドリルの労苦を重ねながら、内なる世界の質的変容を経てやがて到達するものであろう。それは決して神経レベルのＳ－Ｒの固着的自動化によってのみ説明されるものではない。卓越した青眼の構えは、おそらくはそれ自体が価値世界の人格態として捉えることができるのではないか。そしてそれは多くの相手と戦いながら、あるいは自らに更なる修練を課しながら、より高き次元に向けて練り上げられていく。それは剣士としての向上でありながら、同時に自らの内なる価値世界の発展的な再構成でもある。この意味においては、一つの道を突き進みそれを究めようとすることは、ひいては自らの価値形成的な耕作へと繋がっていく筈である。スポーツ的な探究も、それが身体的な恩恵に留まらず、存在形成の可能性という意味において、必ずや価値形成的な高まりを促進していくように思われる。

従って、体育における身体運動においても、人間はつとめて自らを純粋に保ち、その迫り来る運命の瞬間を充実して送らなくてはならない。降り注ぐ状況において可能性の限りそれをつとめ、労苦にさえある価値契機を受容しなくてはならない。これによってこそ、生成の道が啓かれてくる。先の引用のように、自らつとめゆくもののみが神性の顕現に与り、そうでないものはそれを不完全に受け取ることとなる。例え、スポーツ空間が非日常的なるものであろうとも、そこでの生は副次的にせよ、何等かの価値契機を携えてその人間存在の独自の本質へと立ち返ってゆく。スポーツにおいて自らを究めようとする真摯なつとめは、必ずや特有の形式で神性への関与へと導いてく

れよう。高名な弓道家の禅道的な言説を持ち出すまでもなく、スポーツ的な身体運動は、それが実生活に直接的な実利をもたらすものでないとしても、程度の差こそあれ、その内なる世界に何等かの価値契機をもたらす、あるいは生み育てるものであるように思われる。全身を貫く歓喜は、真摯なつとめにこそ降り注ぐ。通俗的に表現するならば、一生懸命の頑張りにこそ内的な報償が与えられる。苦しくも一足ずつ踏み登りながら得た眺望こそが、写真や映像では得られない感動に導いてくれるのではないだろうか。ここに頑張ることの意義が認められる。体育において頑張りを要求することは、身体発達への適正刺激や技能の向上にあるのではなく、うちなる独自の世界の価値形成的な耕作にあるように思われる。例えば、筋繊維の適正肥大やクイックトスの上達はそれ自体が、頑張りの可視的・実在的な効用としてみることができるとしても、体育が教育であることの真意において注視しなくてはならないものは、何よりもそれによって耕されるうちなる豊かさである。これによってこそ、人間は存在形成の可能性を豊かに高めていく。そして、体育も、これによってこそ人間の存在とその生成に促進的に寄与し得るのである。体育学における人間学的論議においては、Spranger, E. の人間学的視界から、そのような知的予感が導かれてくる。

3. 結　語

体育学における人間学的論議は、その様式の如何を問わなければ、全ての体育論議に何らかの形で含まれていると言って良いかも知れない。やはり、前述の通り、体育についての論議は、本質的に人間理解と密接に結びついており、おそらくそこには原理的な連関さえも認められるように思われる。そうであるならば、人間学的論議それ自体に対しても、体育学はそこに学的責務を有することを正しく自覚し、能動的に人間学的問題設定を試みていかなくてはならない。体育学における人間学的問題は、どこまでいっても体育学の問題でしかないのである。

ところが、そうではあっても、体育学における人間学的論議の学的蓄積が全く確かなるものとは言い難い。それ故に、体育学はその関連知に周到に学びつつ、その基礎を確かなものにしていく過程にあるのも否めない。本稿において辿ったSpranger, E. の論議も、それ自体正しく歴史化される必要があるとしても、少なくともここではそこに潜む人間学的契機を正しく抽出し、そこに体育学的な承認を取り付けていくような試みは、やがて体育学における人間学的な基礎の確立に繋がっていくように思われる。従って、体育学は数多くの人間学的論議に学び、それによってその人間学的な思考能力を耕しながら、有効な人間学的論議を不断に積み重ねていくことが求められるのである。

4. 註および参考・引用文献一覧

(1) 川村英男（1966）体育原理．体育の科学社，p.75.

(2) 佐藤臣彦（1993）身体教育を哲学する—体育哲学叙説—．北樹出版，p.71.

(3) Flitner, W.（1970）Allgemeine Pädagogik Ernst Klett Verlag, S.13.

(4) Gerner, B.（1974）Einführung in die Pädagogische Anthropologie, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S.18.

(5) 下仲邦彦編（1977）哲学事典．平凡社，p.1070.

(6) Loch, W.（1963）Die anthropologische Dimension der Pädagogik. Neue Deutsche Schule Verlagsgesellschaft, S.37.

(7) Flitner,W., a, a, O., 3), S.13.

(8) 小笠原道雄（1974）現代ドイツ教育学説史研究序説．福村出版，p.3.

(9) 村田昇（1995）シュプランガーと現代の教育．玉川大学出版，p.1.

(10) 村田昇（1996）「パウルゼンとシュプランガー・その師弟関係」京都女子大学教育科学紀要．36：29-30.

(11) 村田昇（1991）シュプランガー・その生涯」滋賀大学教育学部紀要．41：21.

(12) 村田昇，op.cit., 10), p.29.

(13) 村田昇，op.cit., 11), p.21.

(14) 村田昇（1974）シュプランガー　杉谷雅文（編）現代のドイツ教育学．玉川大学出版部，p.127.

(15) 村田昇（1997）シュプランガー教育学の研究．京都女子大学研究叢刊，26：79-80.

(16) Spranger, E.（1959）Das Leben bildet-Eine geistesphilosophische Analyse, Spranger, E.（Hrsg.）Pädagogische Währheiten und Halbwährheiten, Quelle & Meyer, 75.

(17) Spranger, E.（1948）Philosophische Grundlegung der Pädagogik, Philosophische Pädagogik, Gesammelt Schriften, S.64.

(18) Spranger, E.（1922）Lebensformen-Geisteswissenschaftliche Psychologie und der Personlichkeit, Max Niemeyer, S.14.

(19) Spranger, E., ditto, S.8.

(20) Spranger, E., ditto, S.14.

(21) Spranger, E., a, a, O., 16), S. 74.

(22) 田代尚弘（1995）シュプランガーの教育思想の研究．風間書房，p.255.

(23) Spranger, E., 16), S.75.

(24) Spranger, E., a, a, O., 18), S.173.

(25) Spranger, E., a, a, O., 21), S.75.

(26) 村田昇，op.cit., 15), p.82.

(27) Nosbüsch, J.（1976）Moderne Anthropologie und ihre Bedeutung für pädagogik, Höltenshinken（Hrsg.）Das Problem der pädagogischen Anthropologie im deutschesprachigen Raum, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S.187.

(28) Spranger, E.（1953）Erziehung zur Menschlichkeit, Die Deutsche Berufs-und Fachschule, 49-10 : 706.

(29) Spranger, E., ditto, S.708.

(30) Spranger, E.（1955）Macht und Grenzen des Einflusses der Erziehung auf die zukunft, Pädagogische Perspektiven, S.12.

(31) Spranger, E., a, a, O., 18), S.53.

(32) Spranger, E., ditto, S.53.

(33) Spranger, E., ditto, S.268.

(34) Spranger, E., ditto, S.42.

(35) Spranger, E., ditto, S.292.

(36) Spranger, E., ditto, S.211.

(37) 村田昇（1960）シュプランガーにおける教育の本質概念について．教育哲学研究，3：49.

(38) Spranger, E., a, a, O., 18), S.166.

(39) Spranger, E., ditto, S.338.

(40) Spranger, E., dittio, S.292.

(41) 安藤堯雄（1936）シュプランゲルに於ける陶冶概念と教育概念の関係．教育学研究，4-11：41.

(42) Spranger, E.（1928）Das deutsche bildungsideal der Gegenwart, Quellen & Meyer, S.42.

(43) Spranger, E.（1920）Gedanken über Lehrerbildung, Quelle & Meyer, S.3.

(44) Spranger, E., a, a, O., 18), S.340.

(45) Spranger, E., ditto, S.283.

(46) Spranger, E., ditto, S.302.

(47) 田代尚弘, op.cit., 22), p.254.

(48) 神崎英紀（1978）シュプランガーにおける精神生活の規範性について．九州大学教育学部紀要，24：56.

(49) Spranger, E., a, a, O., 18), S.212.

(50) 新井保幸（1974）1920年代シュプランガーにおける文化教育学思想の特質．教育哲学研究，30：38.

(51) Spranger, E., a, a, O., 18), S.298.

(52) Spranger, E., ditto, S.401.

(53) Spranger, E., ditto, S.400.

(54) Spranger, E.（1954）Gedanken zur Daseingestaltung, R. Piper & Co.Verlag, S.12.

(55) Spranger, E.（1928）Eros, Kulture und Erziehung, Quell & Meyer, S.266-267.

(56) 天野正治（1965）Spranger における“人間らしさへの教育”—第二次大戦後における Spranger 教育思想の一考察．東京教育大学教育学部紀要，11：8.

(57) Spranger, E.（1949）Die Magie der Seele, J. C. B. Mohr, S.71.

(58) Spranger, E., a, a, O., 54), S.12.

(59) 山崎英則（1992）E. シュプランガーの人間教育論，広島女子大学家政学部紀要．28：22.

(60) Spranger, E., a, a, O., 18), S.267.

(61) Spranger, E., ditto, S.239.

(62) 大浦猛（1984）第二次大戦前の日本におけるディルタイ派文化教育学研究の推移—シュプランガー教育思想の研究を中心として—．教育哲学研究，10：22.

(63) 安谷屋良子（1962）シュプランガーにおける教育理想と教育者の位置—戦後の作品について—．教育哲学研究，6：,63.

(64) 輪島道友（1973）シュプランガーの教育思考の方法的特質について．東京教育大学教育学研究集録，12：31.

(65) Spranger, E.（1962）Das Gesetz der ungewollten nebenwirkungen in der Erziehung, Quelle & Meyer, S.124-125.

(66) 村田昇（1963）シュプランガーにおける人文主義と国民主義．滋賀大学学芸学部紀要，13：104.

(67) 天野正治, op.cit., 57), p.4.

(68) 天野正治（1960）シュプランガーの内面的学校改革について—戦後シュプランガー教育思想の一考察—，教育哲学研究．3：62.

(69) Bokelmann, H.：福田弘訳（1992）教育学における合意問題のための人間の論争, Röhrs, H.・Scheuerl, H.（Hrsg.）：天野正治他訳、現代ドイツ教育学の潮流．玉川大学出版部，p.438.

(70) Spranger, E., a, a, O., 18), S.268.

(71) 安藤堯雄, op.cit., 41), p.32.

(72) Spranger, E., a, a, O., 54), S.40.

(73) Spranger, E., a, a, O., 18), S.340.

(74) Spranger, E., a, a, O., 54), S.29.

(75) Spranger, E., a, a, O., 18), S.312.

(76) Spranger, E. (1951) Der Lehrer als Erzieher zur Freiheit, Gesammelt Schriften II, S.340.

(77) 安谷屋良子, op.cit., 63), p.65.

(78) Spranger, E.,18) , S.302.

(79) Spranger, E., a, a, O., 28), S.708.

(80) Spranger, E. (1950) Die Volksschule in unserer Zeit, Spranger, E. (1955) Pädagogische Perspektinen, Quelle & Meyer, S.84.

(81) 長井和雄 (1973) シュプランガー研究. 以文社, p.312.

(82) Spranger, E., a, a, O., 18), S.309.

(83) Spranger, E., ditto, S.242.

(84) Spranger, E., ditto, S.268.

(85) Spranger, E., ditto, S.298.

(86) Spranger, E., ditto, S.288.

(87) Spranger, E., ditto, S.287.

(88) Spranger, E., ditto, S.267.

(89) Spranger, E., a, a, O., 18), S.304.

(90) Spranger, E. (1958) Der Geborene Erzieher, Quelle & Meyer, S.106.

(91) Spranger, E., a, a, O., 18), S.309.

(92) 長井和雄, op.cit., 81), p.277.

(93) Spranger, E., a, a, O., 18), S.287.

(94) Spranger, E., ditto, S.263.